「森林と日本人」
－森林と林業の将来－

山形大学名誉教授　　北村昌美

1、はじめに

現在は，人間にとって森林とは何か，という根源的な課題に直面している時である。森林の荒廃も，林業の不振も，この課題に迫ることなしに解決のいとぐちはつかめない。これまでわれわれは，人間と森林の関係についてあまりにも既成の概念に左右され過ぎてきた。また，森林は科学的に誤りなく定義できるものだという思いこみがあることも否定できない。ではいったい森林とは何なのか。これを各国の森林観という側面からまず探ってみたい。

2、森林の未知の価値

森林の諸機能の中で，木材生産だけが重視されていたかっての時代と違って，現在は各種の機能が認められている。中でも良く知られているのは，いわゆる公益機能と総称されるもの，例えば水源涵養機能や国土保全機能であろう。これらの公益的機能を具体的に示しているのがわが国の保安林制度である。現在保安林としては１７種類あるが，よく見ると森林自体にもともと具わっている機能と，人間が要求してはじめて発揮される性質の機能とがある。公益的機能というのはおおむね前者を指している。この公益的機能を考えてみただけでも，森林の価値の大きさははかりしれない。

ところが，これまであまり意識されることがなかったにもかかわらず，最近急速にその重みを増してきたのが後者である。森林の保健休養機能や文化的機能がそれにあたるであろう。その一例として，森林のレクリェーション機能を考えてみたい。もし人間が林内の澄んだ空気を呼吸し，散策を楽しみたいなどと思わなかったなら，森林は機能を発揮しようにもそのすべがない。この場合，森林の価値を決める鍵は人間の側にあると考えるべきであろう。まして文化的機能の大きさは人間によって決まる。もし人間が文化的に何も要求しなかったとすれば，森林は単に生産と公益的機能を担う「物」でしかなくなってしまうのである。一方，森林に対する人間の要求が大きくなればなるほど，森林の価値も限りなくふくらんでゆく。

このように見てくると，われわれは奥深い森林の価値のほんの一部分しか認識していなかったことに気づく。木材生産も公益的機能も，すでにそれだけで評価しきれぬほどの価値を持っているが，森林の真の価値や意味はむしろまだ知られていない部分に含まれているとみるべきであろう。それはまるで引き出せば無限に力を発揮する人間の能力にも似ているのである。

3、日本人の自然観

ここで，知られざる森林の価値を見出だす人間の側に焦点をあててみよう。つまるところそれは自然観・森林観の問題である。

日本人の自然観の特徴として従来よく知られてきたのは，自然との一体感である。もとも

と日本人は自然を認識できる対象とは考えていなかった。そのため現在のような自然を意味する名詞は，「やまと言葉」にはなかったという。自然は「じねん」と読んで，状態を現す形容詞か副詞，あるいは動詞であった。

自然が現在のような意味でとらえられることを知ったのは，明治になって西欧の近代科学が導入されてから後のことである。西欧では，すでに１７世紀に自然現象や自然物相互の間の因果関係を対象とした自然科学が生れ，その基礎の上に立った技術もまためざましい発展をとげていた。それらと対面した日本人の驚きの大きさは想像を絶するものだったにちがいない。

森林を対象とする学問・技術の分野でも事情は同じであった。国有林はドイツの林学の体系を導入してほぼ全国一律の方針で林業経営に乗り出し，私有林にも同様な方針に従うことを要請した。ところがこの段階では，人間が要望することによって発揮される森林の機能を見落としていたといわねばならない。それどころか，近代科学の導入される以前には日本でもよく知られていた森林の意味まで棄てようとしたのである。具体的に言えば，自然から感じとることのできる神秘的な気持ちや宗教的心情などがそれにあたる。

一方，もともと日本では育っていなくて，西欧の文化の中には早くから定着していたのが風景を見る眼である。自然と一体というふだんの姿勢から推測できるように，自然の風景を横から突き放して見るなどということは，日本人にはできなかったかもしれない。それに対し，西欧の人々は常に自然と自分を対置させ，風景を横から見るという姿勢をとってきた。そのため風景を見る時にはいつもその構図が問題になる。言い方を換えると，風景の一部を額縁で切り取ろうとするのである。日本には風景はあっても，かっては額縁で切り取られることがなかった。風景を見る眼は風景の外にはなく，いつも風景そのものの中に埋没していたのである。

ただし，自然との一体感の薄れた現在では，風景を見る日本人の眼も西欧に近付いてきている。しかしまだ完全にそうとは言いきれない。したがって，自然と一体でもなく，風景を楽しむことも少ないという，一種の中途半端な状態が現在の日本人の対自然の姿勢と言えるであろう。

４、風景の中の森林

西欧にはもともと森林浴という言葉はないが，それは林内にはいることが少ないからではなく，実際はまったくその逆である。あまりに日常化していて，そのために特別の命名を必要としないというのがおそらく真相であろう。たしかに日本では，人々があまり林内に入ろうとしないし，またその楽しみも知らないために，森林浴という言葉が新たに造られたのである。そのためこの言葉の創造の背景には，自然との交流を推奨するという意図がこめられている。しかもそれは健康のためによいからだという。たしかにそれは間違っていないが，本来西欧の人々が林内へ入る際に味わっている風景を見る楽しみが含まれていない。

西欧の人々は，健康よりむしろ風景の方を楽しみにしている。そのために日本では想像もつかないほど風景の楽しさを気にかけるのである。森林の造成も伐採も，林業の立場ばかりでなく風景との関連で計画される。自然の風景の中で，森林はいつも主役と考えてよい。すなわち，額縁で切り取られる構図の中に，森林をどうはめこむかが意識されるのである。

したがって森林はたいてい中景か近景に配置される。それに対して，日本の森林はほとんどの場合遠景に配置されるにすぎない。「山紫水明」というのは日本の風景の美しさを讃える言葉であるが，見方を変えれば森林はいつもこの「紫」の部分を構成しているにすぎないのである。

現在グリーンツーリズムの導入が計画され，中にはすでに実施している所もある。この運動ももともとヨーロッパで発生したものであるが，西欧の人々の風景に対するなみなみならぬ愛着という肝心の点が日本には伝わっていない。西欧では心の安らぐ風景を求めて歩くのが目的で，長い休暇をグリーンツーリズムにあてるのである。したがって，もし西欧に風景を楽しむために林内を散策するという生活文化がなかったら，グリーンツーリズムもまた成立つてはいないであろう。日本にグリーンツーリズムを定着させようとするなら，この点をもっと掘り下げて検討すべきである。

かって第二次大戦直後のドイツが連合国に占領されていたころ，南西部のバーデン・ビュルテンベルク州はフランスの支配下にあった。当時伐採された跡地というのは，いつまでたっても風景の中に残るもものである。それを見て一人のドイツ人が，「フランスの奴が伐りやがった」といまいましげにつぶやくのを聞いたことがある。ドイツの秩序立った伐採計画が乱されたことへの恨みもおおきいにはちがいないが，風景が台なしにされたことへの恨みの方が，あるいはもっと大きかったかもしれない。

5、森林とは何か

ここまで主として森林の機能に焦点を合わせて話を進めてきた。しかしもともと機能というのは人間の側の勝手な思いこみで，森林の関知したことではない。したがって人間と森林の本来の関係は，むしろ機能として取り上げられているもの以外のところにあったと思われる。そこでまず浮かぶのは，森林に対する人間のおそれの気持ちである。役に立つかどうかを考える前に，まず人間は恐ろしいものとして森林をとらえ，次いで畏れの気持ちを抱くに至ったと思われる。この畏れの思いがしだいに宗教心に変わって行ったのであろう。これが自然崇拝の世界である。

かってのガリア（現在のフランス）やブリテン諸島で，古代ケルト人によって信仰されたドルイド教や，日本の修験道などがその範ちゅうにぞくしている。樹木，巨岩，水の流れなどあらゆる自然物の中に生命を感じ，それらと人間が呼応するところに生まれたのが修験道だといわれる。ドルイド教もまた自然崇拝がその基礎となっていて，現在もヨーロッパの至るところに名残をとどめているし，人々の意識の中にもまたその名残が見られるのである。自然をめぐるこのような心の動きには，別に相互の利益関係といったものは存在しない。したがって，森林の機能というよりは人間と森林の原始的な関係とみるべきであろう。

では，このような関係が乱れたのはいつごろであろうか。もちろんいろいろな考えが成り立つし，ある時点を境に急速に変わったというものでもないが，一つの大きな転機を西欧における森林経営思想の発生に求めることができるであろう。森林経営は１８世紀後半から１９世紀に始まっているが，それを支えたのはデカルトの「科学に力を与え，それを数学的方法に従って応用すれば，人間は『自然を統御し所有する』ことができる」という思想だという。これ以来森林と人間の関係は利害にひきずられ，森林は単なる「物」の地位に落ちてし

まった。もちろんこれに力を与えたのは経済法則である。周知の通り，この経済優先の森林のとらえ方は現在まで続いているのである。

直接金銭的な評価の対象にならない場合でも，森林はそれ以後いつも打算の対象になってきた。森林の機能の社会的価値を評価する場合はもちろんのこと，自然を保護するなどといった一見無私のように見える行為にしても，必ず人間を中心にした考えがまかり通っていたのである。こういう状態で自然との共存などと言っても，おそらく自然の方で受け入れないであろう。そこで，何とか自然の立場を考えるとすれば，人間はできるかぎり謙虚な態度で自然と接触するよりほかにとるべき道はない。自然を保護するなどというのはたいへんおこがましいことで，保護されているのが実は人間であることを知らねばならない。

6、森林・林業の将来

これまで述べてきた内容は，けっして林業を否定するものではない。むしろ従来の林業の視野の狭さをうったえようとするものである。人間が要請することによって引き出せる森林の無限の価値や意味を，林業の範ちゅうに含めてしまわねばならない。そして何よりも大切なのは，そういう森林の価値と林業の意義について国民の理解を得ることである。もし充分な理解が得られたなら，森林やその所有者に対する国民の経済的支援を得るのも困難ではない。実際は，国民が森林や林業を支援するというよりも，国民の福祉や文化に対して，森林や林業がその基盤を支えることによって手助けする立場なのである。感謝しなければならぬのは常に国民の側であろう。

具体的な方法についてここで述べる余裕はないが，よく知られたヨーロッパの条件不利地域対策をはじめとして，種々の方法が考えられる。繰り返すが，それらのうちいずれを選ぶにしても，森林の価値に対する国民の理解が前提である。

さらに強調しておきたいのは，林業の範ちゅうをこのように広げたからといって，在来の林業の意義は少しも損なわないということである。人間生活にとって大切なのはもちろんのこと，場合によっては，自然に対する人間の謙虚さを具現する適切な方法ともなり得るのである。もちろんそのためにはたえず技術の向上をはからねばならない。

しかしながら，林業の前途はけっして楽観できるものではない。何といっても森林に対する国民の理解が不充分である。林業が自然破壊だという偏見もまだ消え去った訳ではない。林業にとっても，自然を求める一般市民にとっても，共に必須のものである林道に対する風当たりは依然として強い。しかしこいう逆風をはねのけることができれば，上述のような新しい意味の林業の実現も，けっして夢ではないであろう。その時林業はおそらく最も輝かしい職業の一つとなっているにちがいない。何よりも，身近に自然と接することのできるのが大きな魅力である。